

AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2016 NEWYEAR

千の波濤、桃花染の皇姫
設定ラフィラスト集

大図書館の羊飼いのショートストーリー
内心ラジオ

スタッフ対談

千の波濤
桃花染の皇姫

せんのはとう
つぎそめのこうき



AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2016 NEW YEAR

- | | |
|----|---------------------|
| | 大図書館の羊飼いのショートストーリー |
| 3 | 内心ラジオ |
| | ハンドブック特別企画 |
| 8 | 千の波濤、桃花染の皇姫 ラフィラスト集 |
| 22 | スタッフ対談 |
| 23 | あとがき・奥付 |

まえがき

PREFACE

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

8月22日・23日の両日、東京オペラシティにて

「トラベリング・オーガスト 2015」を開催いたしました。

当日は、多くのお客様にお運びいただきましたこと、御礼申し上げます。

また私たち開発スタッフも会場で聴かせてもらったのですが、

とても素晴らしい音・演奏・構成だったと思います

(私たちがこう書くと自画自賛のようで恥ずかしいのですが)。

当小冊子が配布される2015年冬コミと、翌1月に予定している通販で、

「トラベリングオーガスト2015の模様を撮影・収録したBlu-rayを

販売いたしますので、もしよろしければお手にとっていただければと思います。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、

オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2015年年末・2016年新春 オーガスト/ARIA 拝

千の波濤、
桃花染の皇姫

内心ラジオ

安西秀明

「それ、食いきれるのか」

「ド力食いをしてイライラを吹き飛ばしたいんですよ。それじゃ、いただきます」

大盛りの牛丼を、芹沢さんはわしわしと食べはじめた。

芹沢さんが苛立っているのには理由がある。芹沢さんは、自身が主催する音楽イベントを学園で開催しようとしていた。しかし、今日になって生徒会長である多岐川さんに『別の学園行事で会場が使えなくなった』と開催中止を言い渡されたのだ。学園で開催されるイベントということで多岐川さんも主催の立場だったのが、芹沢さんには何の相談もなかったらしい。

情報が漏れたのか、学園のウェブニュースでも取り上げられている。

「みんな楽しみにしてたのに、って多岐川さんに言っても『知りません』とか答えてくれないんです」

「他の会場は探してくれなかったのか？」

「検討中だそうです。でも多岐川さんがあの調子じゃ、会場が見つかったってイベントなんてまともにできないですよ。ぜんぜん興味なさそうだったし……もーっ！」

冷たく受け答えをする多岐川さんの姿を、容易に想像することができた。

芹沢さんは、怒りをぶつけるように牛丼をかき込んでいた。

「多岐川さん、別に悪い人じゃないんだけどな」

「悪い人じゃないのは分かりますよ。だって私、

多岐川さんのことは嫌いじゃないですから」

「多岐川さん？」

「はい。合理的で強気なところは見習いたいし、大人な女性って感じでいいと思います。私もあんなふうに振る舞えたらって思う時がよくあるんですよ。特に仕事とか」

仕事に真面目な芹沢さんだからこそ、多岐川さんのような人に惹かれるのだろうか。

「多岐川さんを、そんな風に見たことはなかった」

「ただの怖い人だと思ってましたか？」

「いやいや、まさか」

何とかごまかそうとしたが、芹沢さんは楽しそうに笑っていた。

「言われてみれば、多岐川さんに憧れる気持ちもあるよ」

「だからと言って、今回のことを水に流せるわけじゃないんですけど」

ため息混じりに芹沢さんが言った。

「ああいうお堅い人ほど、いじったら面白いものが出てくるんですけどね」

「試しに昼の放送に誘ってみるのはどうだ」

「オファーしただけで怒られそうなので、やめておきます」

芹沢さんに質問攻めされる多岐川さん、という図を見てみたい気もするが。

「とりあえず、イベントに関しては来期の生徒会長に期待します……ふう、ごちそうさまでした」

いつの間にか空になっていた器に、芹沢さんは手を合わせる。開催を諦めたような口調だが、表情にはやはり残念そうな色が浮かんでいた。

翌日の昼休み、なぜか俺は図書部の部室で多岐川さんと向かい合って座っていた。多岐川さんは背筋を伸ばした綺麗な姿勢で、椅子に腰掛けていた。

「えっと、多岐川さん、今日はこういった要件で」





「芹沢さんのイベントの件で、図書部に依頼したいことがあります」

「芹沢さんの？」

「はい。知っているとありますが、イベント会場が別の学園行事で使えなくなってしまうんです。それで、代わりに会場を探してもらえないかと」

イベントの開催を望んでいるような口ぶりに、思わず首を傾げてしまう。

「芹沢さんに聞いた限りでは、多岐川さん、イベントに興味ないのかと思ってた」

「そんなことを言った覚えはありません。というか、会場については検討中だと伝えたのですが」

「じゃあ、態度のせいで芹沢さんに勘違いされたんだな」

イベントの開催中止を言い渡してきた多岐川さんのクールな態度を見て、芹沢さんはそう思ったのだろうが、実際は違っていたらしい。

「イベントを開催したいなら、芹沢さんにもちゃん

と言ってやればいいのに」

「むやみに期待させて、無駄な努力をさせるほうが可哀想ですから」

「ああ、芹沢さんに気を遣ってたのか」

多岐川さんは何も答えず、俺の出したお茶を飲んで返事をこまかした。

しかし、声には本気で気遣うトーンが感じられる。芹沢さんへの冷たい態度は、多岐川さんなりの優しさだったようだ。

「……多岐川さん、生徒会長になって丸くなったよな」

「悪いですか。生徒会の目的は生徒を笑顔にすることですから」

「らしからぬ台詞が聞こえたような」

「私が生徒会長に就任したとき、望月さんにそう言われたんです。……図書部の活動を見てきたのも、きっかけの一つではありませんけど」

最後に小声で付け足した。以前の多岐川さんなら、こうして素直になることもなかっただろう。立場は

人を変えるものだ。

「生徒を笑顔にしたいなら、もう少し他の生徒に優しく接してみたらどうだ？ 芹沢さんも、多岐川さんはイベントに興味ないんだって誤解してたし」

「知りません。それより、依頼は受けて頂けるんですか？」

『知りません』は口癖か。

「でも、会場は生徒会で探したほうが早いんじゃないか」

「生徒会管轄の会場以外にも、使える場所があるんじゃないかと思っています」

話を聞くと、教授会や学生会やらでしか使われていないホールも沢山あるらしい。そこを使う場合、スタッフもかなり増やさなくてはいけないようだ。

……しかし、会場を探したところで、主催の二人がギスギスしていたらイベントが成功する可能性は低いだろう。会場を見つける前に、二人の距離を縮めておく必要があるだろう。

「わかった、こっちでも会場を探してみる」

「生徒会の方では前例のある案しか出てこないのので、期待しますよ」

「図書部には常識がないって聞こえた」

「ええ、常識破りな発想に期待しています」

棘のある言い方ですが、口角を上げる。彼女をよく知らない人は冷たい人だと勘違いしがちだが、多岐川さんの通常運転だ。

「一つ頼みがある。会場を探す代わりに多岐川さんに他の依頼を手伝ってほしい」

「あまり時間は取れませんが、それで良いなら。で、何をすれば？」

「追って連絡する」

多岐川さんに怪訝そうな眼を向けられながら、俺は芹沢さんとの会話を思い出していた。

「これ、今日の台本です。一応、流れだけ確認しておいてください」

芹沢さんから渡された台本の表紙には、『ランチタイム・アベニュー 特別版』と書かれ、その下には『ゲスト：寛京太郎、多岐川葵』と書かれていた。

一緒に台本を受け取った多岐川さんが、ぶるぶると震えている。

「寛さん、何ですかこれは!？」

「依頼を手伝ってくれるって約束しただろ。放送を盛り上げるのが、今日の依頼」

「……今後一切、あなたとは約束をしないようにします、はあ」

多岐川さんはため息をついて台本を読みはじめた。今日の放送のことは、先ほどまで多岐川さんに伝えていなかった。普通に頼んでも出演承諾はしてくれないので、直前に放送室に呼び出してから説明をしたのである。

「ラジオで5秒以上沈黙が続くと放送事故なので、二人とも気をつけてくださいな」

「だってさ、多岐川さん」

「知りません、いま話しかけないでください」

「そんなに気を張らなくても、私の質問に答えてくれるだけで大丈夫ですよ」

「中途半端なこととはしたくないので」

ぴしやりと言われ、芹沢さんは困ったような笑みを浮かべた。

台本を熟読している多岐川さんから離れ、芹沢さんと小声で会話する。

「あの、寛さん、やっぱり多岐川さん怒ってますか?」

「いつも通りだよ。だから芹沢さんも、いつものテンションで放送してくれ」

多岐川さんが会場探しを依頼してきたことは伝えられている。

だが、本人が本心を伝えるのが一番だろう。

——いよいよ放送開始だ。

「はい、皆さんこんにちは。ランチタイム・アベニューの時間です。今日はいつもと違って、急遽ゲストを迎えての放送ですよ! 図書部の寛さんと、生徒会長の多岐川さんですー!」

「寛です、よろしくお願いします」

「多岐川です、お招きありがとうございます」

「二人とも挨拶が固いですねー。ほら、マイクもありますし、一曲歌ってリラックスしてみますか?」

「歌声は安売りしない主義なんだ」

「いやいや、何ですかそのブロ意識」

「あの、こんな流れ台本には書いていませんが?」

「すいません、思わずアドリブ入っちゃいました。多岐川さんはどうですか、一曲?」

「遠慮しておきます」

「それは失礼しました! さてさて、今日はお二人から色んなことを聞きだしていきますよー。まずは生徒会長の多岐川さんに質問です。今期から生徒会長に就任されましたが、就任にあたっての不安や緊張などありましたか?」

「学園の顔ともいえるべき立場なので、就任したばかりのころは少し緊張もしていましたね」

「そうですねー、私も作品の顔である主役を初めて務めたときは、すごく緊張しました」

「ああ、猫耳メイドの役ですね」

「食い気味に答えた多岐川さんに、俺も芹沢さんも目を丸くした。多岐川さんはしまった、という顔をして口をつぐんでいる。」

「やだ、なんで知ってるんですか?」

「多岐川さん、もしかして詳しいのか?」

「こ、これくらい誰でも知っています」

「生徒会長が知ってくれていたなんて嬉しいですね、それでは定番の決め台詞を……『ご主人様! 精一杯ご奉仕させていただきますにや☆』」

いつもの芹沢さんとは違う、甘い女の子のような声色だった。目の前にネコグロップをつけて上目遣いのスーパーキュートメイドが見えかけた。

「さあ、多岐川さんも一緒に」

「は? どうして私が? ……いえ、そうですね、寛さんがやるなら私もやりますよ」

「俺?」

無茶振りをされた多岐川さんが、悪い笑みを浮かべながら俺にパスを回してくる。いきなり放送に出演させたことへの意趣返しだろうか。

「仕方ないな。『ご主人様! 精一杯ご奉仕させていただきますにや☆』」

「あははは! 躊躇とかないんですか!？」

多岐川さんが即座に突っ込みを入れてくる。

「柔軟な対応が図書部の売りなんだ、いや、売りなんですよご主人様☆」

「それはもういいです」

「寛さん、ありがとうございます。なかなかの破壊力でしたよ、ぶぶっ」

芹沢さんが笑いを堪えながらも進行する。放送を聴いているであろう図書部の連中も、今ごろ爆笑しているだろうか。

「では多岐川さん、お願いします」

「いえ、あの、私そういう演技とかは」

「往生際が悪いですよ多岐川さん。寛さんがこまめ体を張ったんですから、さあ!」

「うう、せめて、せめてマイクをオフにしてください」

観念したのか、多岐川さんが懇願する。芹沢さんはいたずらっぽい笑みを浮かべながら考えていたが、やがて仕方ないといった様子で頷いた。

「うーん、まあいいでしょう! では多岐川さんのマイクはオフにして、私と寛さんがリアクションを取るといふことで」

芹沢さんがスタジオの外にいた放送部の部員に合図をすると、多岐川さんのマイクの電源ランプが消えた。

「それでは多岐川さん、ゴーゴー!」

「ご、ご主人様、精一杯ご奉仕させていただきます……ます、ね」

横に座っている俺すら聞き取れないくらいの小声だった。

「多岐川さん、マイクはオフになってるんですから恥は捨ててしましましょう！」

「ご主人様、精一杯ご奉仕させていただきます、ね」「もっと大きな声で！ 胸を張って！ 声は喉じゃなくてお腹から出るんですよ！」

役者魂に火がついたのか、芹沢さんの厳しい演技指導が入った。多岐川さんは顔を真っ赤にして震えている。

「これで最後です多岐川さん！ 多岐川さんの全力を見せてくださいよ！」

「ご主人様、精一杯ご奉仕させていただきますね!!!」「もっと語尾を可愛く！ 多岐川さんはもっと可愛くなれますよ！」

「いただきます、にやあ!!!」

多岐川さんが完全にヤケになっている。芹沢さんもスイッチが入っているのか、変なテンションで盛り上がりつつあった。ひとしきり叫ばせてから、芹沢さんはようやく多岐川さんを解放する。

「さて、たぶん他のマイクが多岐川さんの声を拾っちゃってますけど、気を取り直していきましょう」

「ああ……生徒会長としての威厳が……すみません望月さん」

多岐川さんがうめき声を上げながらテーブルに突っ伏した。そのまま『すみません望月さん』とぶつぶつ呟いている。

「大丈夫だって、多岐川さんはちゃんとみんなに尊敬されてるから」

「わかりきった気休めは結構です」

「本当ですよ？ たえば私とか」

多岐川さんが顔を上げて芹沢さんを見た。芹沢さんは照れ臭そうに笑っている。

「合理的で強気なところとか、大人な女性って感じで憧れますし。あはは、放送で言うのは結構恥ずかしいですね」

「そんなことを言われたのは初めてです」

そっけない反応の多岐川さんだが、くすぐったそうにしている。きつと照れているのだろう。

二人の間にある空気が、放送前と比べて幾分柔らくなっている気がした。イベントの話題を入れ込むなら、こしかなさそうだった。

「俺がその話を聞いたの、芹沢さんが音楽イベントのことを相談してきたときだよな」

「そうでしたねー。イベントといえば、図書部のほうで会場を探してもらってるんですけど、まだ目処は立っていないのでしたっけ」

「ああ、残念ながら」

「でも会場がないのは仕方ないですよ。ファンの人達を期待させ続けるのも悪いし、もう開催は諦めるべきでしょうか？」

芹沢さんが、恐る恐るといった様子で多岐川さんの顔を窺った。多岐川さんは何も言わず、手元にある台本を眺めている。

「おっと、暗い話になっちゃいました」

「悪い、話題を間違えた」

「減点ですよ算さん。この放送は、聴いている人達に笑顔で昼休みを過こしてもらうものなんですから、もっと楽しい話をしてください」

聞き覚えのある台詞だった。横目で見ると、多岐川さんが顔を上げて芹沢さんを見つめている。

「た、多岐川さん？ どうしましたか？」

多岐川さんの様子が急に変わって驚いたのか、珍しく芹沢さんがどもってしまい沈黙が生まれる。

5秒以上沈黙が続けば放送事故。俺が適当な発言をしてフオロすることもできたが、多岐川さんが慌てて言葉を紡ごうとしているのを見て、任せることにした。

「わ、私も生徒を笑顔にするために、生徒会長として活動しています。でも私はまだまだ未熟で、たくさん生徒から冷たい生徒会長だと思われていることも知っています。だけれど、芹沢さんや図書部の方々のように、私も生徒を笑顔にさせたい。だから、芹沢さんのイベントを何としてでも開催させたいと私は思っています」

沈黙を遮るため、多岐川さんは矢継ぎ早に語る。いつものような冷静さは欠片も感じられない口調だった。言葉や態度を取り繕う暇もなく、多岐川さんは本心をさらけ出したのだろう。

多岐川さんが咳払いをすると、芹沢さんも気を取り直したようだった。

「すみません、関係のない話でした」

「そんなことないですよ。それに、多岐川さんも私と同じ目標を持っていたなんて、私も嬉しいですよ」

多岐川さんの本心を聞くことができて、芹沢さんは微笑んでいた。同じ目標を持っていることを理解し合った二人なら、協力してイベント開催に動くことができるだろう。これで図書部も安心して会場を探すことができる。

すると突然、芹沢さんがヘッドホンを押さえてスタジオの外にいる放送部の部員と目を合わせた。俺と多岐川さんには聞こえないが、何かあったのだろうか。そして、芹沢さんは驚いた顔で俺たちに向き直る。

「あの、たくさん生徒から同じ内容のメールが届きはじめたらしくって、『生徒会長の話を聞いて、イベント開催のために協力したくなった』というメールが、現時点で100通以上届いています」

「えっ」

驚きの声を上げたのは多岐川さんだ。信じられない、という顔で芹沢さんを見返している。驚いたのは俺も同じ。新しい生徒会長が初めて語る本心に、多くの生徒が共感してくれたのだ。

「これならあとは会場を押さえるだけだな」

「すみませんが、図書部の皆さん、よろしくお願いします」

「開催できるんですか!？」

芹沢さんが身を乗り出して多岐川さんに詰め寄った。その勢いに気圧されたのか、多岐川さんは仰け反りながら頷いている。

「じゃあ、イベントができるかもしれないってことを、早速ファンクラブの会員にメールさせてください。一秒でも早く伝えたいんで! いいですか? いいですね? やっちゃいます!」

「え、芹沢さん、ちょっと待つ」

「送信!」

携帯を高速で操作し、芹沢さんがファンクラブの会員に対してメールを送った。すると、放送室のどこからか音楽が鳴りはじめる。携帯の着信音か?

「芹沢さんの?」

「え? 算さんじゃないんですか?」

俺と芹沢さんは、同時に多岐川さんの方を見た。

多岐川さんは耳まで真っ赤にして、俯いたまま、ぴくりとも動かない。鞆の中の携帯からは、着信音が賑やかに鳴っていた。

「多岐川さん、ファンクラブの会員だったのか」

「違います違います違います!!!」

多岐川さんはテーブルに突っ伏して『違います』と連呼し続けた。が、その着信メロディは、紛れもなく芹沢さんの曲だった。

■
その後の放送はトラブルもなく無事に終わり、俺たちはスタジオを出た。芹沢さんと多岐川さんはメールアドレスを交換している。もちろんイベントのための連絡用なのだろうが、きつとこの二人はそのうち友人になるだろう。

しかし、芹沢ファンであることを暴露する羽目に

なった多岐川さんはすっかりうなだれていた。

「色んなものを失った気がするんですが」

「代わりに得たものも大きいだろう」

「否定しませんが、他の役員になんて言われるか想像しただけで憂鬱です」

本人は落ち込んでいるが、むしろ他の役員と接しやすくなるのではないかと俺は思っている。他人に冷たく当たってしまう多岐川さんの性格も、これをきっかけに柔らかなるかもしれない。

「芹沢さん、会場が決まったら、イベントの件で生徒会に毎日足を運んでもらうことになりましたからね」

「はい。よろしくお願いします、多岐川さん」

多岐川さんと芹沢さんが握手を交わす。ファンであるのがバレてしまったせいか、多岐川さんはどこか恥ずかしそうだ。そんなことを考えていると、多岐川さんに睨まれた。

「何か?」

「芹沢さんと握手できてよかったな」

「知りません」

顔を赤くした多岐川さんはぶいつと顔を背け、さっさと生徒会室に向かっていった。

「多岐川さんって、可愛いところもあるんですね」

「イメージと違ったか」

「むしろ親しみがわきました」

そう言っただけでほえむ。

「算さん、多岐川さんのこと、ありがたうございました」

「お礼は図書部が会場を見つけて、本番が終わるまで取っておいてくれ」

「はい、イベント開催に向けて頑張らないと。ここまですんなりを巻き込んだんですから、必ず成功させてみせます」

芹沢さんが、ぎゅつと拳を握る。イベントはまだまだ先の話だが、俺は早くも満員の会場を想像することができた。

Fin

千の刃濤、 桃花染の皇姫

特別企画 設定ラファイラスト集

宮国 朱璃

みやぐに あかり

先代皇帝の一人娘であり、最後に残された正統なる帝位継承者。
生まれながらの高貴さを持ちながらも感情表現は豊か。
上品かつ屈託のない笑顔には誰もが心を奪われる。
嬉しくても悲しくても泣いてしまうタイプで、
周囲にからかわれないよう必死に涙をこらえていることも。



夏野：かなり前に描いたような気がする
ラフです。走ってますねー。

榊原：シナリオ中でも走ったり跳ねたり
斬ったりしています。今までのヒロインの
中で、朱璃が一番激しく動いている気がし
ますよ。

呪
装
礼
装



夏野：京都に行くで扇子を買いた
くなります。

榊原：朱璃が持っているのは、恐
らく皇家特注の高級品ですね。皇
国は舞踊が盛んなので、朱璃もあ
る程度は踊れます。

榊原：気丈に振る舞いながらも、実
は泣き虫の朱璃。朱璃の涙には重要
な意味があるので、泣くシーンは毎
度集中しながら書いています。

夏野：ですね。原画側も同じく、かな
り気を遣っています。難しいですが
気合が入りますね。



夏野：可愛い女の子の手作り弁当食べたいです。

榊原：学院にけっこう豪華な食堂があるので、お弁当の出番はあまり無いかもしれませんね……。

夏野：憂いを帯びた表情をしている女の子、良いですね。

榊原：視線の先には、共和国軍に乗っ取られた天京があるのでしょう。



このお弁当じゃ
足りないかな？

制服



〇〇君
居ます？

私服



榊原：実は三階の窓にぶら下がっている、というオチのイラストですね。え、違うんですか？

夏野：握力が人間の域を越えていますね。違います。

榊原：朱璃は箱入り娘なので、服を選ぶときも目移りしすぎて数時間ぐらい悩みます。

夏野：街へ行くと、なかなか帰ってこないそうですね。数時間悩んだ挙句一着も買わなかった、という日もあると思います。

千の刃濤 桃花染の皇姫

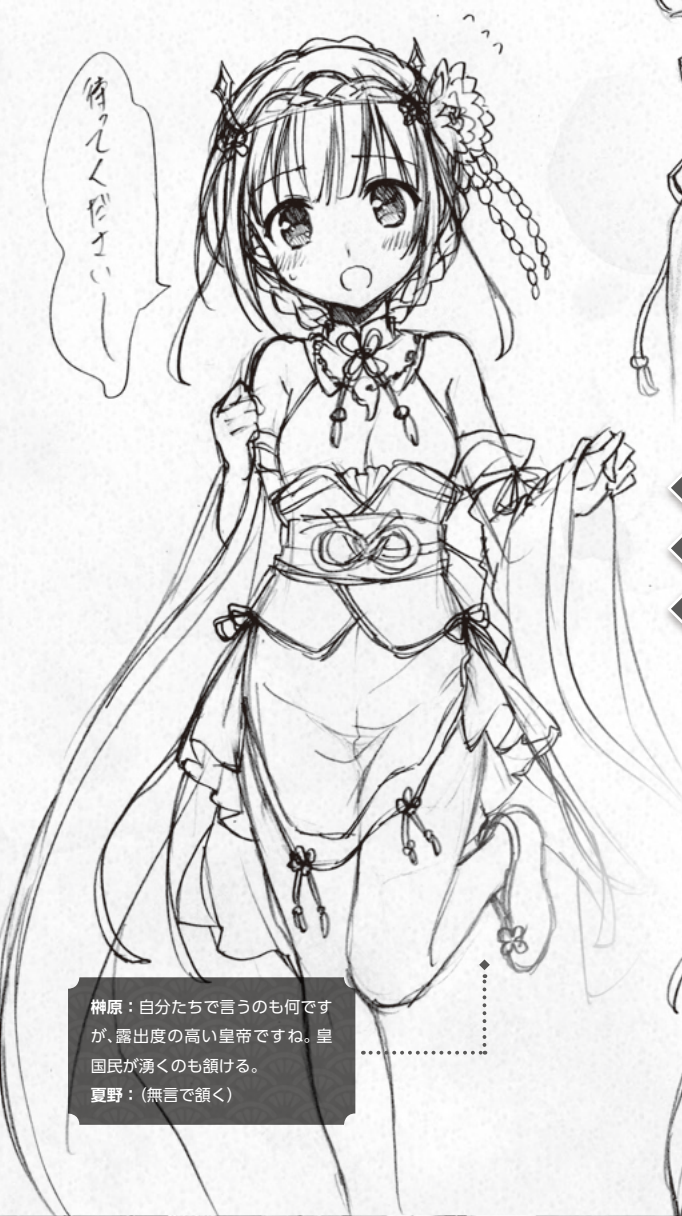
鴉田 奏海

ときた かなみ

戦後すぐに即位した皇国の皇帝、通称《翡翠帝》。
国民に絶大な人気を誇り、可憐な姿と涼やかな声は
敗戦で傷ついた国民の心を癒やしてきた。
性格はかなり控えめ。
男性の数歩後ろを静かについていくような奥ゆかしさがある。



神原：手に持ってるのはクチベニ
スイセン。奏海のイメージフラワー
です。髪飾りには、モデルになっ
た花があるんですか？
夏野：バラ科のものを中心に、
色々な花を組み合わせてデザイン
しています。



神原：自分たちで言うのも何です
が、露出度の高い皇帝ですね。皇
国民が湧くのも頷ける。
夏野：（無言で頷く）

皇
帝
服



夏野：お義兄様からか
われたのでしょうか。
神原：皇帝をからかう主人
公、かなりの大物です。



榊原：右下のよそいき顔とは違う笑顔ですね。やはりこれは、最愛のお義兄様に向けた笑顔ですか？

夏野：そうですね、宗仁と話す時の奏海は無邪気な妹に戻る感じです。

夏野：なんとなく緑側イメージです。緑側で猫と日向ぼっこしたいです。

榊原：あとは可愛い女の子がいれば完璧ですね。

制服



よき行き顔



私服

お祭りにて

世が深山
頂いてしまったので
一緒に食べませんか

大人気だな
よかったです

榊原：皇国で毎年春に行われる、《桃花染祭り》での一幕。戦争が起こる前は、宗仁や詩と一緒に毎年通っていたんでしょうね。ちなみに奏海は武人の家の子なので、射的や輪投げは意外と得意です。
夏野：動体視力、凄そうです。

おはようございます

夏野：背筋をピンと伸ばしている人に挨拶されると自分もピンとなります。普段は思い切り猫背ですが。

榊原：姿勢も礼儀も正しい翡翠帝ですが、お義兄様の前ではベタベタする妹に。

千の刃濤 桃花染の皇姫

椎葉 古杜音

しいのはことね

二千年前から王家に仕えてきた巫女一族の末裔。

明るく奔放な性格でポジティブ思考、いつも周囲を明るくしてくれる。

本人は大人だと言い張っているが、

好物を前にすると自然に表情が緩んでしまったりと、

まだまだ可愛らしいところもある模様。



夏野：古杜音を見ていると、寒いけど初詣に行こうかな、という気持ちになります。

榊原：巫女の衣装はありましたが、本物の巫女さんを出すのは初ですね、そういえば。

巫女服



榊原：落ち着きのない巫女として評判の古杜音。神事に使う鈴や御幣を賑やかに使って怒られている、という罰当たりな設定が最初がありました。

夏野：贅沢な賑やかし……と言っているのでしょうか。



顔色悪いんですけど大丈夫ですか？

夏野：夏の胃腸炎が毎年恒例になっている夏野です。

榊原：古杜音の呪術で治療してもらいましょう。



夏野：自分の寝言で起きる事ありますよね。
 榊原：寝ている古杜音の口に饅頭を入れると、そのまま食べます。

榊原：今作は戦闘員が多く誰も虫程度で怖がらないので、古杜音は貴重な存在です。宗仁なんかは、黒くてカサカサ動くあの虫を素手で潰せたり。

夏野：宗仁へのプレゼントは携帯除菌用ウェットティッシュで決まりですね。

解けましたー？

制服

ふー☆



榊原：皇国の巫女を統べる《斎巫女》には高い教養も求められます。古杜音は巫女としての才能に恵まれています。勉強に関しては努力型。試験前日に一夜漬けをしたりはしないタイプですね。

夏野：あたふたしている印象が強いですが、勉強は毎日しっかりしているそうです。



夏野：古杜音に金槌を持たせると独創的な何かを生み出しそうな気がします。

榊原：そうすると古杜音はドジなので、最後は爆発オチになりそう……。

千の刃濤 桃花染の皇姫

稲生 澪

いのう ほとり

代々続く武人の家の跡取りとして、武人組織「奉刀会」の会長を務める。

宗仁とは幼馴染。同じ剣術道場で共に汗を流していた。

記憶を失った彼の身を案じ、一番近くで支えてきた。

多人数でいる時はクールで口数が少ないにもかかわらず、

宗仁と二人きりになると一生懸命にしゃべる。



榊原：アイドル、奉刀会会長、そして素、という三つの顔を澪は持っています。シナリオではそれぞれのギャップを出すのに苦労しました。CGでも、アイドル時と戦闘時ではかなり雰囲気違いますよね？

夏野：全然違いますね。色も表情も正反対に近いです。それぞれの顔を使い分ける澪は凄いなと思います。

奉
刀
会
服



榊原：武人たちの前では厳然とした澪ですが、宗仁の前では世話焼き幼馴染みにフォームチェンジします。

夏野：たまらんですね。

夏野：戦う女の子はやはり良いものだと思います。

榊原：今作のヒロイン達は、ある時は敵対し、ある時は協力して戦います。その辺りの権謀もぜひ見ていただければと。



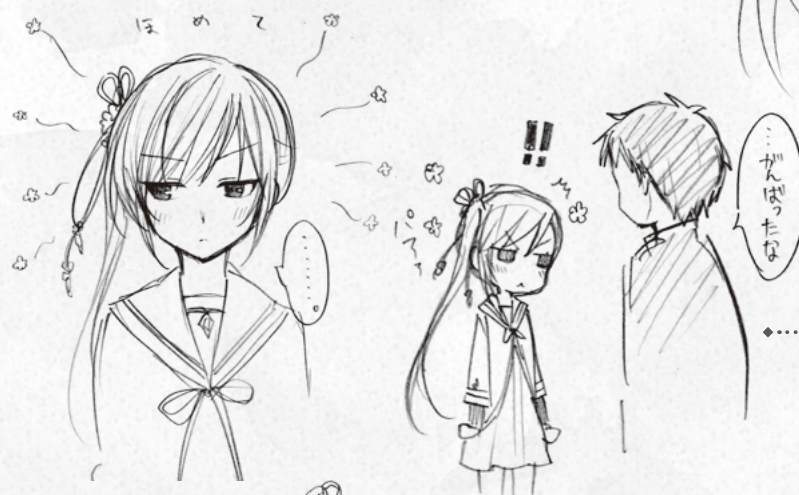


制服



夏野：こういう表情描くのも楽しいです。
 榊原：澪は無表情が多いので、ドン引きしてる顔も一段と輝きますね。

先に謝っておくわよ……
 焦げました……



榊原：澪は幼馴染みということもあり、お弁当を作ってくれたりもします。
 夏野：澪の包丁裁きは凄そうですね。気付いたら切れていた……というような感じで。

榊原：宗仁と同じく、あまり表情のない澪。互いに表情以外の部分で通じ合っているんでしょうね。
 夏野：稽古場などでは特に、会話が無くても通じ合えるくらいの存在だと思います。



夏野：澪は3mの壁を越えてますが、自分は120cmまでしか越えられなかった事を思い出しました。
 榊原：ちなみに、優れた武人はビルを駆け上がったります。

近道
 行くよ!!

早く!!
 遅刻する!!!

無理です
 高過ぎます!!
 キンチク!!!

3m

千の刃濤 桃花染の皇姫

エルザ・ヴァレンタイン

学園の生徒会長を務めると同時に、
共和国政府のスタッフとしても働いている。
敵国のトップの娘であることは広く知られ、その言動はいつも注目の的。
皇帝や武人といった特権的身分制度を解体し、
平等な世界を作ろうと考えている。

軍服



夏野：いつもは気を張っているエルザですが、この表情は年相応に描けたかなと思います。
榊原：軍を指揮している時のギャップが出て、自分も好きな絵ですね。胸の開いた軍服もポイントです。

背中拭いてもらえませんか？

私服



榊原：どういうシチュエーションか気になりますが、エルザの胸は、さすが共和国人といった感じでしょうか。
夏野：夢は大きく持っておけばいいことがあるでしょう。



夏野：立ち絵ではボディラインが分かりやすい服を着ていますが、ふんわりした服も着てほしいなと。
榊原：エルザは軍人でもあり良家のお嬢様でもあるので、ふんわりした服は家のクローゼットにたまり入ってます。

榊原：犬でも人でも、エルザは落ち着きのない相手に構われがちです。シナリオ中では、古杜音との絡みが見所ですね。
夏野：古杜音は絡ませるキャラとの性格に差があるほど、良い方向にかき回してくれるキャラだと思います。ご期待下さい。



例の件
調べておいたわよ



夏野：エルザはかなり要領良さそうですね。他人が休憩している間に仕事を終わらせていそうです。
榊原：ですね。我々も見習いたい……。

制服

あなた、私に対して
矢張り過ぎるのでは
ないかしらっ、



榊原：生徒会長を務めているエルザには、委員長気質もあります。よく見ると、髪飾りが決定稿と違いますね？

夏野：初期デザインの髪飾りはモコモコしていて、少し幼い印象が強くなりますね。

足湯も良いわね……



夏野：ドクターフィッシュを体験した事がない方、是非体験してみてください。

榊原：エルザの場合は、驚いて声を上げたあと恥ずかしがりながら耐えます。

更科 睦美

さらしなむつみ



榊原：お姉さんキャラの更科さん。「クール系」か「ほんわか系」かで揺れていたんですが、結局ほんわか系になりました。目元の泣きボクロが個人的にヒットです。

夏野：泣きボクロ良いですよ。自分も気に入っています。

榊原：更科さんのような女性にお酌をしてもらって飲みたいです。なんなら倒れるまで。そして朝まで介抱してもらいたいです。

夏野：頭から酒をかけて貰いたいですね。



榊原：ほんわかお姉さんな更科さんですが、刀を握った時もそうとは限りません。でも更科さんになら斬られても悔いは無いですよ？

夏野：無いですね。



夏野：自分は梅酒と白ワインが好きです。

榊原：更科さんは飲んでも飲んでも全然酔わなそうです。でも酔ったフリは上手そう。手玉に取られたいです。



夏野：炭水化物は控えめにと言われても食べてしまいます。

榊原：更科さんが女将を務める料理店「美よし」では健康的な和食をお出しするので、ご安心を。

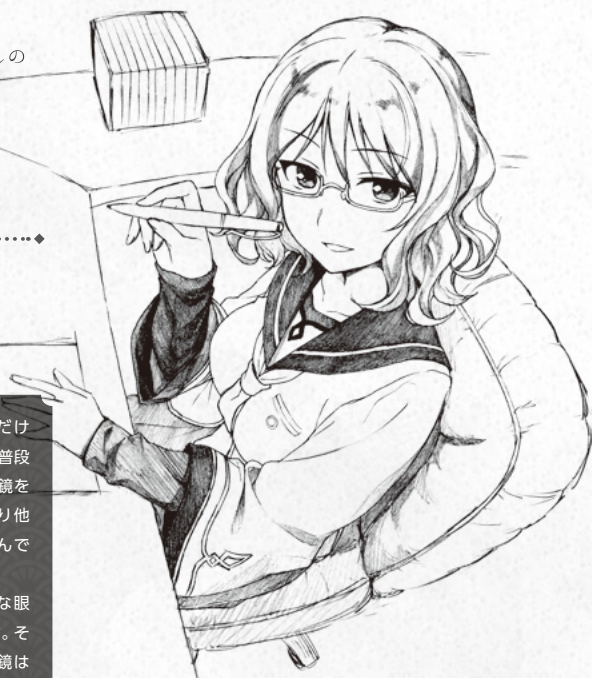
来寫・M・紫乃

くるしま・まくすうえる・しの



榊原：来寫は仕事中だけ眼鏡をかけています。普段は裸眼なので、逆に眼鏡をかけている顔はあまり他人に見られたくないんでしょうね。

夏野：来寫には色々な眼鏡をかけてほしいです。そしてやはり来寫の眼鏡は高級品なのでしょうか。



夏野：お金の匂いを嗅ぎつけた表情ですね。

榊原：来寫財閥の腹ペコ総帥は、料理とお金の匂いに敏感です。

榊原：来寫とエルザは、皇国で戦争が起きる以前の親友です。勝ち気なエルザと、達観した風な紫乃。いいコンビですよ。二人の間に挟まれますが、入る隙間はなさそうです。

夏野：床になれば問題無いです。



千の刀濤
桃花染の皇姫

伊那 子柚

いな こゆず



夏野：買ってから一度も使っていない抹茶セットがあるので、そろそろ使おうと思いました。

榊原：子柚は苦いものが好きではないので、あまり飲ませたげないで下さい！



榊原：サブヒロインの中でも、子柚は最後に設定が固まりました。子柚というキャラの誕生には、メイン原画べっかんこうの意思も強く関わっています。

夏野：さすがです、としか言いようがありません。



夏野：子柚は100m何秒で走るのか気になりますね。

榊原：子柚の家系は代々隠密を輩出してきたので、俊敏さだけでなく他の武人よりも優れています。

榊原：奉刀会では隠密の任務に従事しているので、動きやすさを重視してスパッツを履いていますね。ちなみにスパッツの下には何も履いていないことを想定しています。

夏野：聞きました!? 奥さん!!! 履いてないですって!!!



鴉田 宗仁

ときた そうじん

夏野：種類にもよりますが、観葉植物は2～3週間に一回の水やりでも元気に育つのでオススメです。
榊原：宗仁は花屋に勤めているので、ライター班は花屋の仕事について色々調べたりしました。

夏野：昔剣道部だった時、毎日頭を叩かれているのに何故か成績が上がっていったのが謎でした。
榊原：謎すぎる。とりえず、夏野さんが剣をペンに持ち替えてくれて良かったです。



榊原：宗仁はこれまでの作品の主人公よりも精神年齢がいくらか高いので、シナリオ中では細かな仕草も大人っぽくなっていると思います。いつも落ち着いているので、表情もあまり動きませんね。
夏野：落ち着きのある大人になりたいです。



千の刀濤
桃花染の皇姫

スタッフ対談*42

べっかんこう×榊原拓

べっかんこう それじゃあ今回もはじめましょう。

榊原拓 最近めっきり寒くなりましたね。

べ 外出るときはコートとか着ないとつらいです。

榊 寒いのは嫌ですねえ。

べ でも、女の子がコートやマフラーでもこもしてるの可愛いですよ。

榊 僕は、マフラーを巻いてる女の子の髪の毛が左右にふわっと広がってるのが好きです。

べ あれはいいものです。

榊 えんぺら、という用語もあるみたいです。

べ あと、冬場は黒タイツが映えるという特典もありますね。ストッキングもいいですが、黒タイツにも風情を感じるのです。

榊 黒タイツとかストッキングといえば、先日、友達とサングラスの濃さの単位ってなに？ という話をしていたときに「デニール？」って答えて笑われました。

べ デニールはストッキングの濃さですな。線密度・糸の太さの単位。サングラスはまったく関係ありませんよ(笑) サングラスは普通に透過率とかなのかなあ。

榊 軽く調べてみたんですが、サングラスの濃さの単位ってよくわかりませんでした。

べ だったらデニールでもいいですね。想像しやすいし！

榊 「ほうこのサングラスは80デニールか。あれくらいの濃さだな」とかいう感じで！

べ ところでストッキングって、ヒザとか腿とかふくらはぎで黒いのが薄くなってる場所、あるじゃないですか。

榊 ええ。醍醐味の一つですね。

べ あの薄くなってる場所って、名前ついてるんですかね。

榊 えーと、聞いたことないなあ。「えんぺら」みたいな用語はあるのかな。

べ 僕も知りません。多分無いんじゃないかなあ。

榊 じゃあ名前を考えてみませんか。オリジナルの。

べ えー、そういうのセンス無いんですけど……「スケール」とかでいいんじゃないですか。透ける感じで。

榊 直接的だ。

べ 「べっかんこう君、ちょっとこのヒロインのストッキング、スケールが足りないんじゃないか？」みたいに使う。

榊 透け、だけでいいじゃん！

2015.12.4 16:30 社内にて



あとがき

POSTSCRIPT

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

現在開発室では、新作『千の刃濤、桃花染の皇姫』の制作が進んでいます。

各キャラクターの声優さんもほぼ決まり、収録も始まりました。

なお今回は、『穢翼のユースティア』以来久しぶりに、

主人公にもボイスをつけることにしてみましたので、

こちらもご注目いただければと思います。

体験版は 2016 年春頃のリリースを考えております。

原画・CG・シナリオ各チームとも、

今が一番重要な時期ということで鋭意制作に取り組んでおりますので、

今後のリリース情報にもご注目いただければ幸いです。

それでは、今回はこの辺で。

今後ともオーガスト/ARIA をよろしくお願い致します。

2015 年年末・2016 年新春

オーガスト/ARIA スタッフ一同



千の刃濤、
桃花染の皇姫

AUGUST OFFICIAL HANDBOOK

2016 NEW YEAR

当小冊子の一部のページを撮影し、ブログ・SNS 等に転載していただくことは問題ございません。

※全ページを複製配布することはご遠慮下さい。

… 最新情報満載！オフィシャルホームページにぜひお越しください！ …



<http://august-soft.com/>



<http://aria-soft.com/>





千の刃濤、 桃花染の皇女

AUGUST OFFICIAL HANDBOOK
2016 NEW YEAR